

# 図書館だより

2020年  
10月号  
2020年10月12日発行

9月は雨の日が続くことが多かったですが、ようやく心地よい秋晴れの日を過ごせるようになってきました。外をただ歩くだけでもよい気分転換になりますが、所沢の航空公園ではリフレッシュヨガやスロージョギング教室などが再開されているようです。そうしたイベントで心と体をほぐしてみるのもよさそうですね。

さて、今年の中秋の名月(お月見)は10月1日でしたが、みなさん綺麗な月を眺めることができたでしょうか。収穫の感謝を捧げる儀礼でもあるお月見ですが、まず思い浮かぶのはお団子ではないでしょうか。まん丸に見えるお団子ですが、実は最後に上からギュッと押さえて、感謝の心を吹き込んで作るのだそうです。お月見は過ぎましたが、夜空に浮かぶ月を愛でる時間を楽しむ秋を過ごしてみたいです。



## \*意味を知れば行事はもっと楽しくなる

386-ヤ 『四季の行事』のおもてなし 山本 三千子 || 著 PHP研究所

日本には四季折々に様々な行事があります。新しい年を祝う1月のお正月、福を迎える2月の節分、厄を祓って子どもたちの幸せを願う3月のひな祭り、ひとつひとつの行事には由来があり、そこに込められた思いがあります。上で述べたお月見のように、ただ何となくしきたりとして行っている行事もどうしてこれを飾るのか、どうしてこれを食べるのか、何を願って行われてきたものなのかを知ることで、感謝や祈りの気持ちを持つことができます。私たちの暮らしに根づく日本の心を再発見しながら、行事を丁寧に楽しんでみましょう。

## \*月っておもしろい\*

446- 『月の満ちかけをながめよう』 相馬 充 || 監修/森 雅之 || イラスト 誠文堂新光社

夜空でいちばん身近な天体である月。まんまるの満月を見ると何だかいいことがありそうな気持ちになったり、綺麗な三日月を見ると『不思議の国のアリス』のチェシャ猫を思い出したり、日ごと形を変える月は見上げる度に様々な思いを私たちに抱かせてくれます。そんな月の満ちかけについてイラストを使ってわかりやすく、そして今よりもっと月に興味が湧いてくるように解説してくれています。季節や時間で月がどんな風に変化するのかわかると、月を観察しながらその変化を実際に感じてみたくはなりません。

## 料理レシピ大賞 in Japan 2020が決定しました

9月8日に第7回料理レシピ大賞が発表されました。この賞は、出版社各社がエントリーした料理レシピ本から、書店員と料理専門家が「分かりやすく作りやすい」「日本の食文化や食育に貢献できる」「おいしい、お客様に薦めたいと感じる」などの基準で投票し、得票数で受賞作を決定するものです。今年も2018年、2019年にも著書が入賞を果たした料理研究家リュウジさんが見事大賞を受賞しました！

### 【料理部門】

大賞 596-リ 『リュウジ式 悪魔のレシピ』 リュウジ || 著 ライツ社

準大賞 596-フ 『藤井弁当』 藤井 恵 || 著 学研プラス

★準大賞は藤井恵さんの卵焼き器だけで作るお弁当レシピ。毎日作っても苦にならない簡単さが魅力です。



### 【お菓子部門】

大賞 596-テ 『魔法のてぬきおやつ』 てぬキッチン || 著 ワニブックス

準大賞 596-シ 『極上おやつ』 志麻 || 著 マガジンハウス

★図書館だよりでも紹介した『魔法のてぬきおやつ』が大賞を受賞！おめでとうございます。準大賞には伝説の家政婦 志麻さんの繰り返し作りたくなる定番お菓子のレシピ本が選ばれました。



596-リ 『リュウジ式悪魔のレシピ』 リュウジ || 著 ライツ社

生クリーム代わりにカマンベールチーズを使ったカルボナーラ、エビの代わりにエビシユウマイを使ったエビチリなど【ひとりで人間をダメにするウマさ！】の料理が【短時間で作れる魅力的なレシピが満載です。「おいしそうだけど、カロリーが高そう…」と心配な人も安心してください。餃子のタネを卵で包んだオム餃子や生地の代わりに肉を使ったピザなど糖質を抑えたものもたくさん載っています。料理初心者さんもベテランさんも楽しんで作れるレシピなので色々挑戦してください。

## 図書館司書の「今月はこの本を読みました」

同じ経験をした人がどのようにそれを受け止め何を考えてどう対処していたのか、気になることってありませんか。『仕事本 わたしたちの緊急事態日記』(916-サ 左右社)で、『緊急事態宣言』が出された今年4月7日からの日々、77人の様々な職業の人がどう過ごしていたのかを読みました。保育士4月7日「緊急事態宣言が出るからといって、特に何も変わらないだろう。(略)それどころか、もっと過酷な現場になっている気がする。けど、それが私の仕事」、ミニスーパー店員4月10日「お年寄りの生活圏に近い分、少しだけでも役に立っているんだと思うと、ちょっと救われた気がした。今日も納豆、入荷しますからね」カミユの小説『ペスト』(B953-カ 新潮社)では自分の職務を果たすことが誠実さであり、ペストと戦う唯一の方法と主人公は言います。個々人それぞれの立場の人が各々誠実に何を、何をしなかったのかを記録することは、きっと貴重な資料になります。今からでも、それぞれ記録しませんか【鈴木】



## 「今月はこの本を読みました」特別編！！

いつもは司書が読んだ本を紹介しているこのコーナーですが、「読書の秋に先生方はどんな本を読んでいるのだろうか？」と気になり、今回は読書週間の特別編として先生方にも「今月この本を読みました」の本を紹介していただきました。（お忙しい中、協力して下さった先生方、ありがとうございました！）先生方の感想を聞きながら、みなさんも読書の秋を楽しんでください。



関口校長先生が今月読んだ本は…

### 913.6-ア 『流人道中記』上・下 浅田 次郎 || 著 中央公論新社

万延元年に19歳で家督を継いだ主人公の与力見習い石川乙次郎が、お役目で、姦通の罪を犯したとして、蝦夷地に流罪となった旗本・青山玄蕃を津軽の三厩まで押送するという長い旅を通して成長していく物語です。

今では新幹線に乗ると青森まで3時間で行くことができますが、当時は奥州街道を辿ると片道1か月かかる長旅でした。当初、乙次郎は、身分の高い旗本である玄蕃が罪を犯した事を軽蔑していましたが、道中、罪人である玄蕃が、お尋ね者への報奨、仇討ち、「宿村送り」と呼ばれる旅先で倒れた病人への対応などの厄介ごとを見事にさばいたり人助けをするのを目の当たりにし、それに反発したり悩んだり迷ったりしながら、最後は玄蕃を師匠と思うようになり、そもそも玄蕃が本当に罪人なのか疑問を持ちます。そして、法や制度に縛られ苦悩する人々と接する中で、「法とは何か」、「制度とは何か」を考えるようになります。これは、今の時代に生きる私たちへの問いかけでもあると思います。

笑いあり、涙ありの楽しい読み物です。秋の夜長にぜひ一読を。

教頭先生が今月読んだ本は…

### 913.6-ツ 『冷たい校舎の時は止まる』 辻村 深月 || 著 講談社

辻村深月さんのデビュー作。雪降るある日、いつも通りに登校したはずの学校に閉じ込められた8人の高校生。開かない扉、無人の教室、5時53分で止まった時計。凍りつく校舎の中、2カ月前の学園祭の最中に死んだ同級生のことを思い出す。でもその顔と名前がわからない。どうして忘れてしまったんだろう—。学園祭のあの日、なくなってしまった同級生の名前を教えてください—。「俺たちはそんなに薄情だったのだろうか？」なぜ「ホスト」と呼ばれる謎の人物は私たちを閉じ込めたのか。担任教師・榎はどこへ行ったのか。白い雪が降り積もる校舎にチャイムが鳴ったその時、止まったはずの時計が動き出した。薄れていった記憶、その理由は。

8人の高校生の中には、作者と同じ名前の人物もあり、次々と時が止まる間、人が消えていきます。お互いの関係性が解き明かされ、その事実を追いながら、時が動き出すと温かい季節を感じられるようになります。

なくなってしまった同級生。7人それぞれの進路も明らかになり、同級生に対する気持ちが整理されていきます。読みごたえがある作品です。

原口先生が今月読んだ本は…

### 198-ザ 『ザビエルとヤジロウの旅』 大住 広人 || 著 葦書房

ザビエルとその通訳として従事した日本人ヤジロウ。まさか、ダヴィンチ村のレオナルドと同じで、ハビエル村のフランシスコさんだったなんて。人を殺めて国外逃亡を図ったヤジロウとの偶然の巡り合わせと、長い船旅と、日本行脚と、キリスト教布教とその史実。

伊久美先生が今月読んだ本は…

### 913.6-ニ 『きりこについて』 西 加奈子 || 著 角川書店

「きりこは、ぶすである。」

こんな一文から始まる物語は、いったいどんな結末を迎えると思いますか。

「人は見た目じゃない」と言いますが、自分の顔の美醜を気にしたことがないと自信を持って言える人は多くないように思います。「けっこう気になるタイプです」と言う人はもちろん、「気にしても仕方がないから気にしないで」と言う人にもぜひ読んでほしい一冊です。（猫にとって一番の褒め言葉が「かわいい」だと思っている人も、その真偽を確かめるべく読んでみてはいかがでしょうか。）

鈴木先生が今月読んだ本は…

### 913.6-マ 『劇場』 又吉 直樹 || 著 新潮社

夢見る若者が苦勞するストーリーは、同著者の『火花』にも見られ、著者の下積み時代がうかがえる。

主人公永田の不器用さに、もどかしさを感じるが、沙希という女性の存在によって、少しずつ永田の本性が見えてくる。

何かをつきつめて一生懸命頑張ることは良いことだが、そのせいでまわりが見えなくなるのはまずい。永田の生き様を通して感じ取ってほしい。

遠山先生が今月読んだ本は…

### 946-フ 『NHK「100分de名著」ブックス フランクル 夜と霧』 諸富 祥彦 || 著 NHK出版

フランクルはナチスの強制収容所という過酷な状況に置かれ、絶望にあえぐ人間の様子を克明に記録しながら、人生の意味を訴え続けました。「人生を人間の欲望や願望を実現する舞台のようにとらえてしまうと欲求不満の状態に追いやられてしまう。現代人がこうしたあり方から脱却するためには、まず人生から問われているものであるという原点に立ち戻らなければならない……。」フランクルが求める人生の意味は発想のコペルニクス的転回があり、なんとも心地よいです。また「運命と向き合って生きるための三つの手がかり」も大変深い意味が込められています。しかし、ここではあえてその内容については触れないでおきましょう。

生きる目的とは何か、人生とは、大切にすべきものは……？

秋の夜にいかがですか？

さらっと読めて、かつ唸らせられる、おすすめの本です。

## 📖 今年も読書週間が始まります 📖

10月27日(火)～11月9日(月)は読書週間です。今年は家で過ごす時間が多く、本を読む時間が増えたという人や本が好きになったという人もいます。そうやって色々な本に興味を持ち始めた人がこの読書週間を通してさらに本好きになってくれたら嬉しいなと思います。



今年の標語は『ラストページまで駆け抜けて』です。この標語には「本は自分のペースで読み進めます。道のりが困難でもゴールは待っていてくれる。(作者の言葉より)」という思いが込められています。ラストページまで読み切った時の満足感は何度味わってもいいものです。感動に胸がいっぱいになる時もあれば、アツと驚く展開が心を揺さぶる時や物語のその後を想像して余韻に浸る時もあります。

図書館ではみなさんそれぞれのペースで本の世界を楽しみながら駆け抜けてほしいという思いをこめて、「ラストに〇〇が待っている本」というテーマで展示を行います。今年も読書週間もたくさんのお本と出会ってください。

## 🐱 ラストに和みが待っている本 🐱

913.6-ア 『猫のお告げは樹の下で』 青山 美智子 || 著 宝島社

あなたにしか見えないということは、つまりあなただけが見えるということ。

小さいけれど、アットホームな雰囲気のある神社。そこには時々、不思議な猫が姿を現す。猫はミクジと言い、様々な悩みを抱えた人たちにお告げをくれるのだ。それは一枚の葉に書かれ、受け取った人にしか見えない。失恋の傷が癒えないミハルには「ニシムキ」、中学生の娘と仲良くなりたい父親には「チケット」、自分の欲しいものがわからない田島くんには「ポイント」など、お告げは彼らに自分の心と向き合う時間を与えてくれる。さあ、ミクジのお告げはどんな効果をもたらしてくれるのだろう。

913.6-ハ 『旅屋おかえり』 原田 マハ || 著 集英社

いつも思う。旅が始まる前夜は、どうしてこんなにわくわくするんだろう。

売れないタレント、丘えりかこと“おかえり”は旅番組のレギュラーを失い、路頭に迷う寸前。そんな時に番組のファンだった女性から、難病を患う娘に代わって旅をしてほしいと依頼される。母と娘の切実な思いを聞き、彼女は「旅屋おかえり」として秋田を目指す。依頼主に生きていく勇気を持ってもらうため、家族の絆を取り戻してもらうため、絶対にいい旅をしようと意気込むが、旅はハッピーだらけ。だけど、予定どおりにいかないからこそ見られる景色、感じられる人の温かみが「旅っていいな」と感じさせてくれる。そんな旅をおかえりと一緒に楽しんでみませんか。

## 💧 ラストに涙が待っている本 💧

B796-オ 『聖の青春』 大崎善生 || 著 角川書店

自分には翼がある。名人というはるかないたどりにたどり着くための翼が。

8月に藤井聡太棋聖が18歳1か月で「最年少二冠」を達成しました。これは1992年に羽生善治九段が21歳11か月で達成した年数を大幅に更新した記録でした。羽生九段といえば、史上初の全七冠を25歳で制覇する偉業を成した棋士です。羽生九段がプロデビューした頃、「東に天才羽生がいれば、西には怪童村山がいる」と言われた棋士がいました。それが村山聖棋士です。幼い頃から難病を患い思うようにならない体と闘いながら、将棋に自分のすべてを賭けた村山棋士の29年間を追ったノンフィクション。「名人になりたい」と望む思いの強さがどのページからも伝わってきます。

913.6-セ 『あと少し、もう少し』 瀬尾 まいこ || 著 新潮社

一つのことをみんなで繋いでいくのは、とんでもない重圧がある。

榊井くんの中学最後の駅伝はまず走るメンバーを集めることから始まった。榊井くんの他に長距離を走れる陸上部員は弱気な相楽と無邪気な後輩俊介の二人だけ。駅伝を走るためにはあと3人が必要。そこで榊井くんが口説き落とすのは、問題児太田と、嫌味な渡部と、お調子者のジローだった。この個性豊かなメンバーで果たして県大会へ行くことはできるのだろうか。それぞれが心の内側で葛藤を繰り返し、仲間とぶつかったり、自分に苛立ったりしながらも走ることを通じて、自分の殻を破っていく。1区から6区までどの区間も繋がれていく襷に込められた思いに胸が熱くなります。

929.1-ソ 『アーモンド』 ソン・ウオンビョン || 著 矢島 暁子 || 訳 祥伝社

自分でも理解できない僕を、人に理解してもらうことができるかな。

生まれつき感情を持たない僕は、笑うことも泣くこともない。怒りも恐怖もない。そんな僕のことを「かわいい怪物」と愛してくれたあちゃんが死に、僕が危険な目に合わないよう努力し続けた母さんが眠り続けたままになった時もやっぱり僕はいつものように無表情だった。ひとりぼっちになった僕は、感情のままに動き、問題ばかり起こすゴニという少年と出会う。感じない僕と、感じすぎるゴニ。正反対ではあるけど、僕らはどちらも怪物で、どちらも周りから浮いていた。そんな二人がお互いの存在に触れ、自分の中の何かを変えていく。それが何なのかを読んで感じてみてください。

## ラストに衝撃が待っている本

B913.6-イ『イニシエーション・ラブ』 乾 くるみ || 著 文藝春秋

ユウキってたしか、夕方の夕に樹木の樹って書くんだよね？

人数合わせで参加した合コンで僕はナルオカマユコに出会った。そして、出会った瞬間、恋に落ちた。喋るのが苦手で不器用な僕だけど、彼女もまた僕に興味を持ってくれ、デートを重ねる内にふたりは付き合うことになる。僕は彼女を「マユ」と呼び、マユは僕を「たっくん」と呼ぶ。そんなふたりの甘くて辛い青春の日々が描かれた恋愛小説…と思って読んでいると、驚きのあまり「ええっ!？」と声をあげてしまうラストが待っています。一体、彼らの間に何が起こったのか。もう一度、読み直さずにはいられない気持ちになります。

913.6-コ『サクリファイズ』 近藤 史恵 || 著 新潮社

教えてほしい。どこからやりなおせば、この結果を避けられるだろう。

この世でもっとも過酷なスポーツとも呼ばれる自転車ロードレース。その選手としてチーム・オッジに所属する白石誓は勝利を掴むよりも、エースに勝利を託しアシストとして走る方が自分には合っていると感じていた。オッジのエースは石尾豪。とことん勝ちにこだわる姿勢を「やりすぎだ」というチームメイトもいるが、誓は別の見方をしていた。しかし、石尾さんの本心を知らないまま、ふたりが出たレースで最悪のアクシデントが起きてしまう。次第に見えてくる事故の裏側には誰にも想像できない真相が待っていた。臨場感あふれるロードレースの描写にも注目して読んでほしいです。

B933-ク『アクロイド殺し』 アガサ・クリスティー || 著 早川書房

このわたしはどんな小さな秘密でも探りだします。それが仕事ですから。

ミステリーの女王アガサ・クリスティーが生んだ名探偵エルキュール・ポワロ。彼が本編で挑むのはイギリスの小さな村で起こった殺人事件。殺されたのは地主のロジャー・アクロイド。姿を消した養子のラルフ・ペイトンが怪しい、執事のパーカーが怪しい、家政婦のラッセルが怪しい、と容疑者として名の上がる者は多いが、決定的な証拠は見つからない。しかも事件に関わりがあるとされる全員がそれぞれ何かを隠している。その1つひとつを解き明かしながら真実に近づいていくポワロ。その結末で明らかとなる犯人の姿と思いがけない展開とは。最後まで気を抜かず読んでください。

## 新着本コーナーの気になる1冊

498-パ『すごいストレッチ』 城田 ミナ || 著 インプレス

簡単で気持ちよくて日常でもやりやすいストレッチが紹介されています。高校生のみなさんの体にも効きそうなストレッチもたくさん載っています。眠気をとばしたい時には「前屈サビ取りストレッチ」、やる気が出ない時は「片鼻呼吸法」、勉強のしすぎで目や肩が疲れた時には「疲れ目ツボ押し」や「肩甲骨はがし」などを試してみてください。疲れをほぐして、明日もまた頑張りましょう!



732-コ『世界のなかで自分の役割を見つけること』 小松 美羽 || 著 ダイヤモンド社



24時間テレビのチャリティシャツをデザインしたり、個展に9日間で3万人が訪れたり、出雲大社に奉納する絵画を描いたり注目現代アーティスト小松美羽さん。小松さんはこの本を『あなたの「これから」を、私の「これまで」を通じて見つけていただくための本』と言います。自分自身とどう向き合い、未来をどう描き、うまくいかない時をどう乗り越えたのか、自分のこれからの照らし合わせながら読みたい1冊。

913.6-シ『母さんは料理が下手すぎる』 白石 睦月 || 著 ポプラ社

山田家長男の龍一朗は、母と三つ子のために父直伝の料理の腕を振るう。三つ子の透・蛍・渉は自分だけの個性を探したり、切ない恋をしたりと小学一年生ながら青春真っ只中。料理下手な母親 琴子は一家を背負って働き、交通事故でこの世を去った父親 武蔵は、あっちの世界で惣菜屋を開きながら家族を見守る。そんな一家の賑やかで、おいしそうで、心温まる物語。第1回おいしい文学賞受賞作。



913.6-ハ『走ル』 羽田 圭介 || 著 河出書房新社



お下りのレース用自転車を物置から発掘した僕。ペダルを漕ぐと心地よく、自転車を学校まで走らせる。それだけのはずが気がつけば僕は学校をサボり、東京を飛び出し、埼玉、そして栃木にたどり着いていた。帰らなくちゃと思いつつ、目的を持たずどこまでも走っていた。衝動に勝てず、僕は翌日も翌々日も自転車を走らせる。無謀だけど、どこまでも自由な旅の終着点はどこになるのだろう。